



ジェイムズ・ヘンリー・ハモンドにおける管理と向上

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002661

ジェイムズ・ヘンリー・ハモンドにおける管理と向上

滝野哲郎

言語文化学研究（英米言語文化編）

2010・3 第5号抜刷

大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科

ジェイムズ・ヘンリー・ハモンドにおける管理と向上

滝野哲郎

ジェイムズ・ヘンリー・ハモンド(1807-64)は、アンティベラム期サウスカロライナの裕福なプランターとして、そしてまた奴隷制を強力に擁護した著名な政治家として知られているが、もともと彼は経済的に恵まれた環境のなかに生まれ育ったわけではない。ハモンドが誕生したとき、父親のイライシャ(1774-1829)は教師として生計を立てていた。イライシャは、その5年前、マサチューセッツから成功の機会を求めてサウスカロライナに移り住み、ニューベリーという小さな町で教職に就き、数年後に結婚、まもなく長男ジェイムズが生まれたのである。¹

ハモンド家にはその後、次々と子どもが誕生し、家計の状況がよくなることはなく、イライシャは教師として忙しく苦勞の多い日々を送っていた。その父親の姿をそばで見ながら成長したハモンドは、やがて自分の境遇や将来について思いを巡らすようになったのだろう。12歳のころには、「偉くなること、それが人にとって一番大事な目標である」という考えを抱くようになった。15歳のとき、ナポレオンに強い印象を受け、「あのように低い身分からあれほど高い地位に上り詰めたものはほかにはいないであろう」、そして「彼には友人はいなかったが、才能があった。仲間はいなかったが、強い向上心があった。財産はなかったが、たくましい精神があった」とその生き方に共感した。ちょうど向上心が膨らみはじめたハモンドにとって、ナポレオンはまさにこれから自分が進むべき方向を指し示してくれているように思えたのであろう。²

当時、サウスカロライナ社会の頂点にあったのはプランター階級である。プランターたちは、奴隷制プランテーションを經營し、そ

れを経済的基盤として社会と政治において権力を握っていた。ハモンドはのちに次のように述べている。「アメリカのプランターは、基本的に、他国における貴族のような存在である。プランターが社会と政治の頂点に立ち、その下に弁護士と政治家が位置し、そのあとに医者、商人と続くのである」。このような社会構造のなかで育ち、将来にたいして強い意欲をもっていたハモンドが、プランターになることを強く意識したとしても不思議ではない。本稿では、ハモンドがどのような成長過程をたどり、そしてどのようなプランターになったのかについて、彼にとって重要な意味をもつと思われる管理と向上という点を中心にして考えてみたい。³

1

ハモンドの成長過程を理解するうえで、もっとも重要な人物は父親のイライシャであろう。イライシャは、息子が社会や人生にたいする考え方を形成する過程において大きな影響を与えた。イライシャは、若いころから勉学にたいして強い熱意を抱いていた。はじめは肉体労働に従事していたが、向学心からダートマス大学に入り、苦学して28歳で卒業した。そして1802年、わずかな金銭を携えてサウスカロライナ州チャールストンに到着し、ニューベリーのマウンテン・ベッスル・アカデミーで職を得ると、大学で習得した知識を活かして教育に力を注ぐようになった。イライシャは「まれに見る有能な教師」であったが、思ったほどには収入がなく、法律を学び弁護士になった方が経済的に成功できたかもしれないと思うこともあった。⁴

ジェイムズ・ハモンドは、8歳まで父親の学校の敷地内で暮らしていた。いつも生徒たちが寄宿舎で生活し教室で学ぶ様子を間近で見ながら育ち、「100人ほどの生徒のなかで暮らすうちに、8歳のころには人の性格や習慣について多少わかるようになっていた」という。イライシャは、生徒だけでなく子どもの教育にも熱心に取り組

んだ。とりわけ早くから長男ジェームズの才能に注目し、ラテン語・ギリシア語・修辞学・化学・経済学などを教えて教養を身につけさせ、その将来に期待をかけるようになった。自分が実現できなかったさらなる成功への可能性をハモンドに託していたのであろう。利発な少年であったハモンドは、幼少より学ぶことへの意欲を掻き立てられた。のちにハモンドは、自分の成功は、「知識への尊い憧れ、向上への気高い願望を早くから私に植えつけてくれた父のおかげだ」と述べている。父は息子の才能を信じ、そして息子はそれにこたえたのである。⁵

ハモンド家の経済状態は安定することはなく、1815年、一家は州都コロンビアに移り、イライシャはサウスカロライナ大学の寄宿舎で食事係として働くことになった。ハモンドは、今度は大学生を近くで見ながら暮らすことになった。各地から来て寮生活をする学生たちは、ハモンドにとって興味深い観察の対象であった。また州都の雰囲気も刺激的で、州庁舎や議会に出入りする政治家の姿に心を動かされたこともあった。このような経験を通して、これまではただ漠然と想像していた将来への思いが、目に見えるかたちでしだいに形成されていったのであろう。⁶

父親の熱心な教育によって知識と能力を急速に身につけたハモンドは、16歳のとき、サウスカロライナ大学3年次に入学した。州各地から良家の子弟が集うこの大学には、ハモンドのような家庭環境の学生はまれであったが、イライシャは、息子の将来に強い期待を寄せて入学させたのである。当時、サウスカロライナ大学は、多くの議員・知事・裁判官を輩出し、州政治で重要な役職を担う人材を育成する場所となっていた。ハモンドは、この大学の「頑固なまでに伝統的な古典重視のカリキュラム」によって教養を磨き、当時のサウスカロライナの保守的な政治思想について学び、2年後に優秀な成績で卒業した。⁷

大学を卒業すると、ハモンドはまず教師になったが、父親の助言もあって法律事務所で働きながら弁護士資格を取得し、コロンビア

で弁護士として働きはじめた。また政治に関心を示して『サザン・タイムズ』の編集にも携わった。1829年、苦勞の多い人生を送った父親がこの世を去った。おそらく父が結婚について語ったことを思い起こしたにちがいない。進むべき方向を展望するハモンドは、有力者の娘との結婚を望むようになった。才能と意欲ある青年であれば、たとえ出自に恵まれなくても結婚によって将来への可能性を大きく広げることができるのである。ほどなくプランテーションを所有する由緒ある家柄の娘キャサリン・フィッツシモンズと出会った。ハモンドは、彼女との結婚によって土地と奴隷を手に入れることができたのである。⁸

父親の強い期待と熱心な教育によって向上心を育み、ついにプランターになったハモンドであるが、ここに至るまでにはいろいろと心勞もあつたのであろう。少年時代を振り返り、「今でも幼いころに夜怖い夢を見たことを思い出す」という。そして「慢性の消化不良になった」ともいう。父親の徹底した指導のもとで、彼は「頭と神経をすり減らしてしまった」のであろう。怠けるようなことがあれば、鞭で打たれることもあつた。ハモンドが父親の望むとおりに学業で成果をあげるのはけっして容易なことではなかつた。父親の期待と管理は、少年ハモンドにとって励みにはなるが精神的な重荷にもなつていたのである。⁹

向上を目指すハモンドが父親から学んだのは、知識や能力だけでなく、職業や人生についての指針、そして生活態度であつた。なかでも、ハモンドの人生において重要な役割を果たすのが、自己を管理する能力である。欲求や感情を抑えて自らを管理できれば、成功を手に入れることができると教えられたのである。父親は「南部の若者の半分以上は放蕩にふけり、どうしようもない人間になっている」と嘆き、ハモンドには「そのようになってもらいたくない」と願うのである。そしてこの「父親から学んだ精神」は、つねに「自分のなかに生き続けた」とハモンドは回顧する。¹⁰

ハモンドの自己管理の様子が明らかにされるのは彼の日記であ

ろう。プランターになると彼は、自分に起こった出来事を克明に日記に記していた。そこにはまたさまざまな不満や苦悩も綴られている。自分や周りのものを管理することに努めるハモンドは、思い通りに物事が進まないとき、健康状態が思わしくないとき、家族が指図に従わないとき、政治活動や商取引がうまくいかないとき、その苛立ちを日記に吐露したのである。「何でも打ち明けられる人がいなかった」ハモンドにとって、「そのような友人が見つかるのは、この日記のなかである」。管理することによって生じる困難や苦勞を書き記し、そうすることで「自分の鬱憤を晴らす」ことができたのであろう。¹¹

ハモンドにとって、日記は自らを振り返るためのものでもあった。日記には、自分自身の性格や境遇についての記述がたびたびあらわれる。あるときは「自分がとても性格が悪くつまらない人間であることはわかっている」といい、「自分よりひどい人が成功することも、そしてその逆も見てきた」ともいう。そのときどきの感情や思いを記し、その分析を試み、そしてそれを読み返すことで、これまで歩んだ軌跡をたどっていたのであろう。そして「前のページを参照することで、多くの問題が解決できるかもしれない」と思うのである。管理にこだわるハモンドは、不満や苦悩の多い日々を送っていたが、日記は、その苦しい状況から抜け出す糸口を見いだすためのものであった。この日記は、これまでの自分を検証し、今後の自分を管理するための道具であった。¹²

2

父親の厳しい指導と管理のもとで成長したハモンドは、自己を管理することだけでなく、ほかの人間を管理することについてもおのずと学んでいたのであろう。プランターになると、奴隷の管理に強い関心と意欲を示すようになった。ハモンドは、結婚の際、妻方のフィッツシモンズ家からシルヴァーブラッフのプランテーションを

引き継ぎ、それによって奴隷 147 人を所有することになった。これまで奴隷を所有した経験がないハモンドは、今後多数の奴隷を労働に従事させ、綿花栽培で収益をあげ、シルヴァーブラッフの暮らしを維持していかななくてはならない。だが、この奴隷管理は予想以上に手間のかかる仕事であった。というのも、これまでフィッツシモンズ家は、プランテーションの管理にはほとんど注意を払わず、雇った監督人に任せきりにしていたため、奴隷たちはあまり働かず、健康状態もよくなく、規律のない生活を送っていたからである。その結果、このシルヴァーブラッフには耕作されずに放置されたままになっている土地がかなり残っていた。ハモンドは、主人としての支配がゆきわたるプランテーションを築いて綿花栽培を軌道にのせることに精力を傾けることになる。¹³

ハモンドは、シルヴァーブラッフの奴隷の労働や生活にたいする監視と管理を強化しようとした。奴隷たちは、これまで管理や規律には慣れていなかったもので、命令にたいして不服従や反発を試みるものがあつた。指図に従わないもの、決められたとおりに労働に従事しないもの、無断でプランテーションを離れるものなど、ハモンドはさまざまな問題に直面することになった。命令に従わない奴隷には罰を与え、支配者としての自分の存在を知らしめようとしたが、管理の徹底は容易なことではなかった。奴隷たちは彼に「試練を与える」存在となった。ハモンドは、監視を厳しくするとともに、労働の形態を大幅に変更した。これまでは、奴隷には 1 日の仕事の割り当てが決められていて、それを終えれば、あとは彼らの自由な時間になっていた。そのため、早く終えるために急いで雑な仕事をするものもいたし、また自由な時間が増せば、それだけ監視の目が行き届きにくくなった。そこでハモンドは、日の出から日没まで奴隷を集団で働かせることによって、労働力を十分に活用しようとした。収益をうむプランテーションにするには、奴隷を効率的に働かせることが必要なのである。¹⁴

シルヴァーブラッフの奴隷は以前より厳しい条件で働かされた

ため、病気になるものや死亡するものが増加するようになった。日記にも、「プランターになってから、所有する奴隷が次々と死亡し、惨めな気持ちを味わってきた」と記される。ハモンドは、奴隷を亡くしたときにはひどく落ち込んでしまう。「二人の大切な奴隷」の病状が悪化したとき、「医師によれば、2日前に病気になった7歳の少年は、もはや助かる見込みがなく（もう死んだかもしれない）、もう一人の12歳の少年は熱がとても高くて具合が悪い」と落胆する。ハモンドは日ごろから、奴隷の健康状態を把握し、食料や衛生状態に注意を払い、病人やけが人が出たときには、医師がいなければ自ら治療にあたっていた。そして薬を用意し、医学書を読んで治療に関する知識を高めようとした。プランターにとって、奴隷は大切な財産であり労働力であったので、彼らが労働に従事できる状態を維持することは重要であった。ハモンドは、奴隷の労働を厳しく管理する一方で、奴隷の健康管理にも気を配ったのである。¹⁵

奴隷所有者がプランテーションの秩序維持に役立つと考えていたのが、奴隷の家族である。これによって奴隷の生活に安定と規律をもたらすことができ、プランテーションの管理がしやすくなると考えられた。シルヴァーブラッフでは、奴隷が夫婦で暮らし家族をもつことが許されていた。ハモンドは、できる限り家族の一部を売却することは避け、家族という単位を維持するようにしていた。家族を残してまで逃亡する奴隷はめったにいなかったからである。またハモンドは、奴隷の家族内に問題が生じたときは、その解決にあたった。「ジョー・グッドウィンを鞭打ち、妻のところへ戻るように命じた」、また「トム・カロックを鞭打った。彼はこれまで鞭打たれたことはなかったが、今回は私が自ら30回鞭打った。サリヴァンの妻マギー・キャンベルに手を出したからである」。ハモンドは、奴隷の子どもたちの世話にも関わっていた。これによって「奴隷は子どもに無関心になるだろう。子どものことは私に任せ、自分たちでは面倒を見ないであろう」という。ハモンドは、奴隷が生活のあらゆる面で主人に依存した状況をつくり、彼らを管理しやすい状態に置

こうと考えた。¹⁶

プランターにとって、自分以外の権威がプランテーション内に存在することは望ましいことではない。ハモンドは、奴隷たちが彼らだけで礼拝することを認めず、「夜に礼拝をすることを禁じた」。奴隷たちだけの礼拝は、彼らに連帯感をもたらし、逃亡や反乱の引き金になる可能性があったからである。ハモンドは自分の教会に奴隷たちを来させたり、白人牧師を雇ってそのもとで礼拝をさせた。そして奴隷は、神とともに主人であるプランターに従うことを教えられたのである。¹⁷

アンティベラム期のアメリカでは奴隷制の問題がしだいに人びとの注目を集めるようになり、北部では奴隷制廃止運動が高まりを見せていた。南部ではそのような動きの影響にたいする懸念がはじめ、ハモンドも気がかりに思うときがあった。たとえプランテーションの監視を強化しようとも、外部からはさまざまな情報が入り込み、奴隷のなかには奴隷解放運動について知っているものもいた。また、近隣における奴隷の不穏な動きや事件をきいて、不安に思うこともあった。1844年の書簡には、「つい最近、この川下で何軒もの家屋が奴隷によって火をつけられた。たいへん恐ろしいことである。迅速で効果のある措置をとらなくてはならない」と記している。奴隷解放運動の拡大にともない、南部のプランターたちは、しだいに奴隷の反乱や事件にたいして警戒感を抱き、監視や巡回警備を強化するようになった。¹⁸

ハモンドは、秩序維持のために奴隷の管理を徹底する一方で、しだいに現実的な対応をとるようにもなった。息子への忠告には、「奴隷を限度まで働かせずに緊急時にそなえて余裕を残すこと」、「奴隷の宗教活動は、興奮を抑え穏やかなものであること」、「厳罰ではなく、できる限り口頭で注意すること」とあった。厳しいだけでは奴隷の管理はうまくいかないこと、そして奴隷との関わり方への配慮が必要であることを認識するようになったのであろう。このようにハモンドは、現実的な対応をとりつつ管理への強い関心を持

ち続けることによって、プランターとしての30数年間、プランテーション経営に成功することができたのである。¹⁹

3

アンティベラム期の南部社会においてプランターになり上流階級に加わると、それはさらなる向上への足がかりになった。裕福なプランターになったハモンドは、そののち連邦下院議員、州知事、連邦上院議員に選出され、サウスカロライナ政界の実力者の一人となった。彼自身の言葉によれば、「いたるところでよく耳にするのだが、サウスカロライナではほぼ誰もが、私がこの州でもっとも政治と知性において優れた人物であると思っている」。そして連邦議会で声高に奴隷制を擁護すると、南部の代弁者としてその名を国中に馳せるようになった。²⁰

ハモンドは、当時の南部において飛躍的な向上を成し遂げた人物である。彼のもっとも親しい友人であったウィリアム・ギルモア・シムズ(1806-70)も、向上という点ではよく似た道をたどったといえよう。チャールストンの恵まれぬ家庭環境に生まれ育ったシムズは、自ら法律を学んで弁護士業をはじめ、まもなく創作活動に専念するようになり、富裕なプランターの娘との結婚によってプランテーションの主人になった。そののち数多くの小説や詩を発表して絶大な人気を博し、当時の南部においてもっとも著名な作家として知られるようになった。ハモンドと同様、彼も才能と努力によって向上を目指し、結婚によってプランター階級の一員になったのである。²¹

1839年にはじめて出会った二人は、それ以来、政治・社会・文化などさまざまな話題について意見を交わすようになった。シムズは「強く闊達な精神をもち世間のことに詳しく」、ハモンドはこれまで関心のなかった分野の知見を広めることになった。のちにシムズは二人の関係について、「私と彼ほどよく似た考えの持ち主はいなかつ

たであろう」という。「彼には全幅の信頼を寄せていたし、彼もそうだったと思う。知性においても通じ合うことが多かった。たしかに二人には共通するところがとても多かった」と述べている。また、二人はともに由緒ある家柄の出ではなかった。そのため上流階級の人びとのなかには、彼らの出自を見下すような発言をするものもいた。ハモンドは、「マサチューセッツから来た冒険家の息子」と揶揄されたことがあり、シムズも同様に出自について陰口をたたかれたことがあった。このようなとき、二人はともに疎外感を味わわされたにちがいない。また、自分たちの才能が十分に評価されていないという苛立ちを感じたこともよくあった。二人の親交は、意見において一致する点が多かっただけでなく、向上という共通の軌跡によって深まったとも考えられる。²²

ハモンドの生涯は、彼を取り巻く社会環境に影響を受けながら、しかもそれにうまく適応したものであったといえる。プランターがプランテーション経営を基盤にして政治と経済の主導権を握っていた当時の南部にあって、いかに奴隷を管理して秩序を保ち利益をあげるかがプランターにとって重要な課題であった。この管理という点において、ハモンドはきわめて有能なプランターであったといえる。徹底した管理のもとで奴隷を効率的に労働させて収益をあげ、資産を築いていったからである。このプランテーション社会にあってこそ、管理に長けたハモンドは才能を十分に発揮し向上することができたといえよう。

富を築き権力を獲得したハモンドは、しかしながら、精神的に満ち足りた日々を送っていたわけではない。「私は世間から運が強く幸せな人間の典型と見られているが、その判断は誤っている」といい、「これまで一瞬たりとも人生の至福を味わったことはなかった」とさえいう。管理に執着するあまり、自分の意に沿わない結果になると、周りのものにたいして苛立ち、自分に不幸が降りかかったと嘆いた。このようにハモンドにとって管理へのこだわりは、向上に役立つ一方、しばしば彼に精神的苦痛をもたらすことにもなった。生

涯を通じて健康管理に余念がなかったハモンドであるが、歳を重ねるにつれて悪化する持病や体調不良をどうすることもできなかった。管理に疲れ果て惨めな晩年を送ったハモンドは、南北戦争さなかの1864年11月、彼を育んだ奴隷制南部が崩壊していくなかでこの世を去った。²³

注

1. ハモンドの生涯に関しては下記の文献を参照。Elizabeth Merritt, *James Henry Hammond, 1807-1864* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1923); Drew Gilpin Faust, *James Henry Hammond and the Old South: A Design for Mastery* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1982); Carol Bleser, Introduction, *Secret and Sacred: The Diaries of James Henry Hammond, a Southern Slaveholder*, ed. Carol Bleser (New York: Oxford Univ. Press, 1988), 3-23; Drew Gilpin Faust, *Southern Stories: Slaveholders in Peace and War* (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1992), 54-71.
2. ハモンド家ではジェームズのあと1810年から10年間に7人の子どもが誕生し、そのうち成人したのはジェームズを含め4人であった。Faust, *Hammond*, 12.
3. James Henry Hammond, "To M. C. M. Hammond," 9 May 1848, Merritt, 43. Walter B. Edgar, *South Carolina: A History* (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1998), 288-323.
4. Merritt, 11. イライシャは、マウント・ベッスル・アカデミーで教師として勤め、一時期サウスカロライナ大学で教鞭をとったのち、再びアカデミーに戻ってその校長となった。
5. Faust, *Hammond*, 8. James Henry Hammond, "To Dear Doctor," 26 June 1826, Faust, *Hammond*, 8.
6. 経済的に苦しい状態が続いたイライシャは、農業・商売・はしけ

業を手がけたこともあった。

7. Henry H. Lesesne, *A History of the University of South Carolina: 1940-2000* (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 2002), 1. Daniel Walker Hollis, *South Carolina College* (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1951), 165. 南北戦争以前, サウスカロライナ大学は South Carolina College という名称であった。
8. Fred Hobson, “A Southern Tragedy,” *Mississippi Quarterly* 36 (1983): 586.
9. James Henry Hammond, “To Simms,” 5 March 1861, Faust, *Hammond*, 12.
10. Faust, *Hammond*, 7, 9.
11. *Secret and Sacred*, 25 (6 Feb. 1841), 106 (30 Aug. 1842).
12. *Secret and Sacred*, 107 (30 Aug. 1842), 25 (6 Feb. 1841).
13. プランターの奴隷管理については下記の文献を参照. Orville Vernon Burton, *In My Father's House Are Many Mansions: Family and Community in Edgefield, South Carolina* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1985), 148-202; Mark M. Smith, *Debating Slavery: Economy and Society in the Antebellum American South* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1998), 42-86; Jeffrey Robert Young, *Domesticating Slavery: The Master Class in Georgia and South Carolina, 1670-1837* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1999), 193-230; William Kauffman Scarborough, *Masters of the Big House: Elite Slaveholders of the Mid-Nineteenth-Century South* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 2003), 175-216; Faust, *Hammond*, 69-103; Faust, *Southern Stories*, 54-71.
14. Smith, 42-59. Faust, *Hammond*, 73.
15. *Secret and Sacred*, 106 (30 Aug. 1842).
16. Norrece T. Jones, Jr., “The Black Family as a Mechanism of Planter Control,” *Society and Culture in the Slave South*, ed. J. William Harris (London: Routledge, 1992), 162-87. Burton, 167.

17. Scarborough, 189-93. Faust, *Hammond*, 73.
18. James Henry Hammond, "To John C. Calhoun," 10 May 1844, Faust, *Southern Stories*, 69.
19. Faust, *Hammond*, 103.
20. *Secret and Sacred*, 210 (14 Dec. 1850).
21. John Caldwell Guilds, *Simms: A Literary Life* (Fayetteville: Univ. of Arkansas Press, 1992), 111-64, 205-96.
22. *Secret and Sacred*, 49 (30 March 1841), 327. Guilds, 296. William Gilmore Simms, *Letters of William Gilmore Simms*, ed. Mary C. Simms Oliphant, Alfred T. Odell, and T. C. Duncan Eaves, vol. 4 (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1982), 469-70. Chalmers Gaston Davidson, *The Last Foray: The South Carolina Planters of 1860, a Sociological Study* (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1971), 75. Francis W. Pickens, "To Lucy Holcombe," 6 Dec. 1857, *The Hammonds of Redcliffe*, ed. Carol Bleser (New York: Oxford Univ. Press, 1981), 32.
23. *Secret and Sacred*, 106 (30 Aug. 1842).